

Title	日本語換喩表現の研究 : 名詞句単位の換喩を中心に
Author(s)	大田垣, 仁
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59393">https://hdl.handle.net/11094/59393</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	大田 垣 仁
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 25336 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	日本語換喩表現の研究 ― 名詞句単位の換喩を中心に ―
論文審査委員	(主査) 教授 金水 敏 (副査) 教授 岡島 昭浩 准教授 井元 秀剛

## 論文内容の要旨

本論文は、日本語の換喩を対象とし、主としてメンタル・スペース理論からその理論的基礎について論じ、また通時的な語義変化と語彙項目の生成について実証的に論じたものである。

「導入」に続き、第1部「日本語換喩表現の共時的的研究」には、第1章「日本語換喩表現の単位」、第2章「換喩研究史の概観と問題点の整理」、第3章「換喩と個性」、第4章「換喩と述定」、第5章「換喩とカテゴリーの境界」が含まれる。続く第2部「日本語換喩表現の通時的的研究」には、第6章「換喩と意味変化」、第7章「換喩と名付け」が含まれる。さらに、「結論」「既発表との対応」「参考文献」「辞書・事典」「用例出典」を最後に置く。A4判131頁、400字詰め換算で約470枚に相当する。

「はじめに」では本論文の研究対象、研究方法、構成等について概観する。第1部第1章では、換喩を名詞句単位と文単位に分け、そのうちから研究対象を名詞句単位の換喩に限定することを述べる。第2章では換喩の成立原理を扱った国内外の代表的研究について整理し、その問題点を指摘している。第3章では、これまでの研究でひとしなみに換喩として扱われてきた言語表現をメンタル・スペース理論から見た時、「語用論的コネクターが存在する純粋な意味での換喩」「値の側面のずれが語用論的コネクターの存在にみえる換喩

もどき」「換喩由来のカテゴリー化がなされているが共時的にはもはや換喩とはよべない名詞」の3つに区別できることを示す。第4章では、前章で示した「兼用表現」(語用論的コネクターのトリガーとターゲットの両方を一つの文で表す表現)が、日本語の換喩と換喩もどきを区別するテストフレームとしてもっとも適用範囲が広く強力であることを述べる。第5章では、第3章と第4章で扱った換喩と換喩もどきの区別を精緻化し、とくに先行研究で、作家で作品をあらわす「換喩」とみなされてきた例が、実際は換喩と換喩もどきの両方の特徴を持つことを述べる。

第2部第6章では、『日本国語大辞典第2版オンライン版』の検索を通じて、換喩が介在した名詞のカテゴリー化について分析する。第7章では、典型的な換喩の一部やエポニムが、カテゴリー化によってあらたなカテゴリーをうみだす現象であるのに対して、人名を用いた換喩もどきの類型(作家で作品をあらわすなど)は、そのような過程をもたないことを示す。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の功績は、兼用表現というテストフレームを活用することによって、従来混同されることの多かった、いわば“真性”の換喩と、換喩もどきが厳密に区別できることを示した点にある。本論文で言う換喩とは、「語用論的コネクター」によってトリガーの役割(カテゴリー)とターゲットの役割が連結されている状態を言う。「(飲食店で) かつ丼 (かつ丼を食べた客) が くい にげした。」がその例で、品物と注文者がコネクターで結ばれている。この場合、「\*こうばしい臭いで出汁 が きいた かつ丼 が くい にげした。」のように、トリガーの属性とターゲットの属性を同じ名詞句に対して述語に使う(兼用表現)ことができない。一方、典型的な換喩とされることの多い「薬缶 (=薬缶の中の水) が 沸騰 している。」のような例は、「赤い取っ手 の ついた 薬缶 が 沸騰 している。」のように兼用表現に何ら問題がない。このような例では、名詞句の値の側面のずれが語用論的コネクターのように見えていだけの「換喩もどき」とされる。このような区別について、それを示唆する論はこれまでもあったものの、ここまで明晰に分析して見せた論はなく、この点で高く評価できる。またこの区別によって、「漱石 が一番上の 棚 にある。」のような作家で作品をあらわす類の換喩の二重性も明らかにされた。

本論文はさらに、換喩の定義を厳密化・精緻化するだけでなく、歴史的な語義変化について換喩がどのように関わるかということを実証的に示した。その結果、真性の換喩は新しいカテゴリーを生じさせることがあるのに対し、換喩もどきはそのような作用がないことを示し、上記分類が単なる理論的な操作にとどまらず、具体的に日本語の変化を捉える際にも有効な概念であることを説得的に示したのである。

しかしながら、いくつかの問題点も指摘しておかなければならない。真性の換喩によって示されるのが個体なのか、カテゴリーなのか、また何をもってカテゴリー化されたと言

えるのかといった、意味論的に重要な問題が十分検討されているとはいいがたい。意味論の先行研究に対する理解の不十分さも散見される。また通時研究としている章は、実際には現代語における静的な分析に留まっていて、真に言語変化の動態を捉えているとは言えないという批判も成り立つ。表現が冗長で同じ例文、同じ記述が幾度も繰り返される点も気になる。とはいえ、これらの問題は、本論文の本質を損なうものではなく、今後の研究の進展によって十分乗り越えられるものと判断できる。

なお、2012年2月6日に本論文の公開の口頭試問を行い、最終試験を終えた。この点もふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。